

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12526

研究課題名(和文) 地域保健における子育てプログラムCAREの効果的な実践方法の検討

研究課題名(英文) Study on effective practice of CARE parenting program in community health

研究代表者

木村 一絵 (Kimura, Hitoe)

九州大学・医学研究院・助教

研究者番号：30432909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：地域保健における子育てプログラムChild-Adult Relationship Enhancement (CARE) の2回6時間の効果を明らかにすることを目的とした。研究デザインはランダム化比較試験(対面実施)とし、オンラインCAREは介入前後比較試験とした。対象は2歳～小学校4年生の子どもの母親とし、調査内容は対象者背景、子どもの問題行動、育児ストレス、親の養育行動と関係性認知、養育スキル、事後質問とした。対面のCAREでは幼児・小学生の問題行動、親の養育行動と関係性認知、養育スキルが改善した。オンラインでは、幼児の問題行動、育児ストレス、親の養育行動と関係性認知、養育スキルが改善した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

CAREプログラム(2回6時間)の子ども問題行動の減少や問題行動に対する親の困難感の減少、親の育児ストレスの軽減、養育行動と関係性認知の改善、養育スキルが改善していた。また、小学生の養育者を対象としたCAREも、子どもの問題行動に対する親の困難感が減少し、親の養育行動と関係性認知、養育スキルが改善したため学術的に意義がある。そして、対面CAREだけでなくオンライン実施のI-CAREにおいても、子どもの問題行動や母親の育児ストレスの軽減、親の養育行動と関係性認知の改善、養育スキルが改善するという結果が得られたことは、コロナ禍における子育て支援の効果を示せたため社会的意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the effects of the Child-Adult Relationship Enhancement (CARE), a parenting program in community health, twice for 6 hours. The study design was a randomized controlled trial (face-to-face CARE), and the online CARE was a before-after study. The subjects were mothers of children aged 2-years-old to 4th grade of elementary school. The survey contents were subject backgrounds, child's problem behavior, parenting stress, parenting behavior and relationship recognition, parenting skills, and post-intervention investigations. In face-to-face CARE, problem behaviors of infants and elementary school students, parenting behaviors and relationship recognition, and parenting skills improved. Online, child behavior problems, parenting stress, parenting behavior and relationship recognition, and parenting skills improved.

研究分野：地域保健 地域看護 公衆衛生看護

キーワード：CARE 子どもと絆を深める 子育て支援 プログラム ランダム化比較試験 子どもの問題行動 育児ストレス 養育スキル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本の地域保健サービスにおいて、子育て支援プログラムは普及しているが、子どもの問題行動の減少を主目的としたプログラムは少ない。子育てに困難感を抱える母親が子育てプログラムを受講し、養育スキルを身に付けることは、問題行動の減少及び問題行動の悪化予防、さらには母親の育児ストレス軽減が期待できる。子どもの問題行動は、幼児期・学童期には明確になってくるため、地域保健分野における支援が重要である。

CARE: Child-Adult Relationship Enhancement¹⁾は、親子関係をよりよくし、子どもとの絆を深めることを大切に心理教育介入プログラムである。このプログラムの目的は、子どもとかわる全ての大人が子どもに対する肯定的な行動を増やし、子どもが指示に従いやすくすることである。つまり、子どもの行動をマネジメントするための基本的なペアレンティングスキルを学ぶ、大人のためのトレーニングモデルである。CARE は子どもの問題行動が減少する効果が認められている心理療法 PCIT: Parent-Child Interaction Therapy²⁾などの中心概念が取り入れられ、親などの養育者だけでなく子どもとかわる全ての大人を対象としている。CARE は、PCIT などの問題行動を軽減するために有効な概念を合計 3~6 時間程度のワークショップで、集団を対象に実施する内容に改良したプログラムである。CARE に参加して学んだ内容を家庭で子どもに実践することで効果が期待できる。

2. 研究の目的

米国や日本において CARE は実践されているものの、ランダム化比較試験(以下、RCT)によって CARE の効果検証をした研究は、世界的にみても近年報告された 2 研究のみ^{3, 4)}である。その一つである Samantha et al. が実施した研究³⁾では、プライマリケアを受診した 2-6 歳の子どもの子育てをしている母親に対し、1 回 1.5 時間を 6 回、合計 9 時間の CARE による介入をしていた。コントロール群との比較の結果、問題行動の軽減と育児方法改善(子どものニーズに対する共感の増加、体罰使用の軽減、子どもの権利や自立の尊重)の効果が報告されていた。もう一つの Messer et al. の論文⁴⁾では、3-12 歳の里子を同居して養育している里親に対し、1 回 3 時間を 2 回、合計 6 時間の CARE による介入を行い、スタンダードな心理的介入との比較研究をしていた。1 回 3 時間の CARE 介入後、1 か月後に実施した 2 回目の介入時は、1 回目と比較して、子どもとかわる際に減らしたい言葉かけが有意に減少し、増やしたい言葉かけが有意に増加した。また、介入 3 か月後の子どものトラウマ症状である、心配の問題と怒りの問題が有意に軽減していた。

CARE は日本国内においても導入され、1 回 3.5 時間の CARE 介入研究では、前後比較により子どもの問題行動・育児ストレス軽減の効果があつたものの、ランダム化比較試験においては、子どもの問題行動を減少するには至らなかった。その理由は、対象者数が少ないことや、介入の効果量が低いことであった。そこで、効果量を高くするため 3.5 時間に 2.5 時間を追加し、2 回で CARE を提供した場合、繰り返して強化できることや復習できることから、効果が期待できると考えた。つまり CARE を 2 回で合計 6 時間介入した場合の子どもの問題行動、母親の育児ストレス、子どもとの否定的な関係性、親の養育行動と関係性認知、養育スキルに関する効果を明らかにすること、また、その介入方法の違いにより効果に差があるかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究デザインはランダム化比較試験(RCT)とし、プログラム参加群とコントロール群を平行群間比較した。また、2021 年度は介入方法が対面からオンラインに変更したため、前後比較試験とした。研究対象は、3 時間以上の CARE プログラムの参加が初めてであり、プログラム参加時に 2 歳~小学校 4 年生の子どもを持つ母親(20 歳~64 歳)とした。研究対象者に対し、研究参加者の募集後、研究実施施設において研究の説明会を実施し、その説明会において研究の同意書の記入および回収をした。

調査内容は、対象者背景、子どもの行動評価⁵⁾⁶⁾(ECBI: Eyberg Child Behavior Inventory)、対象者のうつ⁷⁾(TQCI: Two-question care-finding instrument)、育児ストレス⁸⁾(PSI-SF: Parenting Stress Index Short Form)、親の養育行動と関係性認知⁹⁾(子どもとの否定的な関係性・子どもへの否定的な養育行動・子どもへの肯定的な養育行動)、養育スキル¹⁰⁾(感情的叱責・注目・関与・スパンキング・援助的コミュニケーション・きげんとり・不適切行動の無視・身体的攻撃)事後質問(質的質問を含む)とした。調査方法は 2018 年度と 2019 年度は自記式質問紙調査とし、2021 年度はオンライン調査とした。ランダム化により、プログラム参加群と Waiting list 群に分け、プログラム参加群に CARE を実施した後、その結果を Waiting list 群と比較した。プログラム参加群へのプログラム参加終了後(4 週間後)に Waiting list 群にも CARE を実施した。この間、プログラム参加群には CARE の効果が持続しているか、フォローアップの調査を実施した。

介入したプログラムは CARE プログラム¹¹⁾とし、2 回(3.5 時間+2.5 時間)とフォローアッププログラム 1 回(1.5 時間)とした。CARE プログラムは、PCIT と同じく前半部分と後半部分の

2部から構成されている。プログラムの前半は、子どもとの良好な関係を築くために大切なできるだけ増やしたいスキルと、できるだけ減らしたいスキルなどについて、心理教育と具体的なロールプレイの見学・実践を通して習得していただいた。プログラムの後半は、参加者が大人役と子ども役の立場を変え実施するロールプレイによって、適切な指示の出し方のスキルの習得を図った。CAREプログラムを実施するには、CARE-Japanが実施するファシリテータートレーニングを受講し、ファシリテーターとして認定されたものが教育をする必要がある。そのため、本研究におけるCAREプログラムはファシリテーターの資格のある者が実施した。

データ分析方法は、質問票から得られた情報を、統計学的および、質的記述的に分析した。なお、研究実施に際し、研究計画書を倫理委員会に提出し、承認を受けてから実施した。

4. 研究成果

2018年度と2019年度は、当初の計画通りCAREワークショップを対面で実施できた。しかし、2020年に新型コロナウイルスが流行したため対面実施が難しい状況となり、2020年度の介入は中止した。その間、対面ではなく遠隔（オンライン）で実施できるI-CAREが開発され、日本語翻訳版が仕上がったため、2021年度はI-CAREによる介入研究を実施した。

1) 2018年度と2019年度の対面によるCAREワークショップの結果

ランダム化比較試験によりアウトカム評価をした結果、幼児の問題行動の頻度と問題数、育児ストレス、親の養育行動と関係性認知（子どもとの否定的な関係性、子どもへの否定的な養育行動）、養育スキル（感情的叱責・スパンキング・身体的攻撃）は、Waiting list群に比べプログラム参加群は有意に改善していた。また、小学生の問題行動の問題数と親の養育行動と関係性認知、養育スキルはWaiting list群に比べプログラム参加群は有意に改善していた。

介入後の質的データを分析したところ、CAREプログラム介入後の変化は、子どもの行動面では【養育者にとって好ましい子どもの行動が増えた】、【子どもの感情が安定した】、【子どもの社会性が発達した】、【養育者にとっての子どもの問題行動が減少した】、【子どもの自発的な行動が増えた】、【子どもの行動に大きな変化を感じていない】、【子どもが成長した】の7カテゴリーが、また、養育者と子どもの絆では【養育者と子どもとの関係性がよりよくなった】と【お互いにスキップを求めることが増えた】の2カテゴリーが抽出された。また、養育者の子育てに対する意識では【養育者が子どもの立場にたって行動するようになった】、【子どもと向き合うようになった】、【子どもを肯定的に受け止めるようになった】、【子どもへの意識が変化した】、【子どもと養育者間の愛情に気付くようになった】、【子どもへの否定的な感情が減少した】の6カテゴリー、養育者自身の意識では【母親が穏やかに過ごせるようになった】、【子育てに対して前向きな気持ちを持てた】、【子育ての悩みが軽くなった】、【養育者が変われば子どもも変わることに気づいた】、【子ども主導の関係づくりを意識するようになった】、【褒めることの大切さに気付いた】の6カテゴリーが抽出された。更に、養育者の行動では【CAREのスキルが使えるようになった】、【子どもとの会話や遊びに積極的に参加するようになった】、【子育てが円滑に行えるようになった】の3カテゴリーが抽出された。

2) 2021年度のオンラインによるI-CAREワークショップの効果

I-CAREは介入前後比較試験により、子どもの問題行動の問題数スコア、育児ストレス、親の養育行動と関係性認知（子どもとの否定的な関係性、子どもへの否定的な養育行動、子どもへの肯定的な養育行動）、養育スキルが有意に改善していた。

3) 得られた成果と今後の展望

この研究において2回6時間のCAREプログラムの介入により、育児ストレスの軽減、親の養育行動と関係性認知の改善、子どもとの否定的な関係性の改善、子どもとの否定的な養育行動の減少、養育スキルが増加し、感情的叱責が減り、スパンキング（子どもを叩くこと）が減り、身体的攻撃が減ったことがわかった。また、子どもに対する効果としては、問題行動の頻度が減り、子どもの問題行動に対する親の困難感も減少する効果があることが示された。短い時間のプログラムでこのような効果が見られたことは、この研究の国内外における初めての報告であり、意義があると考えられる。

また、小学生の養育者を対象としたCAREプログラムの介入に関しても、子どもの問題行動に対する親の困難感が減少し、親の養育行動と関係性認知、養育スキルが改善する効果があることがわかった。幼児だけでなく、より幅広い年齢の子どもに使用してもらえるスキルとしてCAREが有効であることを示せたことも成果と考える。

そして、対面CAREだけでなくオンライン実施のI-CAREにおいても、子どもの問題行動に対する親の困難感の軽減、育児ストレスの軽減、親の養育行動と関係性認知（子どもとの否定的な関係性、子どもへの否定的な養育行動、子どもへの肯定的な養育行動）の改善、養育スキル（不適切行動の無視）が改善するという結果が得られたことは、重要なことである。つまり、今後、新たな感染症が流行したとしてもオンラインプログラムを実施することに切り替えて介入することでも効果が期待できる可能性が高い。さらに、エビデンスレベルは低くなるも、質的記述的分析により、新たに様々な効果があることも示された。

CAREプログラムは2-18歳の子どもを対象とした子育てスキルを大人に示すものである。今

後の展望として、まだ研究されていない子どもの年齢である思春期の養育者を対象としたプログラムや、母親だけでなく父親を対象としたプログラム、幼稚園教諭や保育士、小学校・中学校・高校の教員を対象とした CARE プログラム、子育て支援を実施する専門家に対する CARE の研究を計画したいと考えている。また、CARE プログラムを実施する効果的な回数や時間を示すことや、1回3.5時間の CARE と2.5時間を追加した2回6時間の CARE の介入では効果に違いがあるのかを示していきたい。さらに、介入方法や内容の違いにより効果に違いがあるかも分析することで、よりニーズに合った介入内容を検討できると考える。この研究で得られた質的な効果を量的研究で示していくことも検討している。

引用文献

- 1) Robin HG, Erica PM, Joshua M, et al.: Child-Adult Relationship Enhancement (CARE): An evidence informed program for children with a history of trauma and other behavioral challenges: Child Abuse & Neglect, 53, 138-145, 2016.
- 2) Eyberg SM.: Parent-Child Interaction Therapy: Integration of traditional and behavioral concerns. Child and Family Behavior Therapy, 10(1), 33-46, 1988.
- 3) Samantha S, Benjamin F, Steven J, et al.: Child-Adult Relationship Enhancement in Primary Care (PriCARE): A Randomized Trial of a Parent Training for Child Behavior Problems. Academic Pediatrics, 17(1), 53-60, 2017.
- 4) Messer EP, Greiner M, Beal S, et al.: Child Adult Relationship Enhancement (CARE): A brief, skills building training for foster caregivers to increase positive parenting practices. Children and Youth Services Review, 90, 74-82, 2018.
- 5) Eyberg SM, Pincus D.: ECBI & SESBI-R: Eyberg Child Behavior Inventory and Sutter Eyberg Student Behavior Inventory-Revised; Professional Manual. PAR, FL, 1999.
- 6) 加茂登志子: ECBI 使用マニュアル 日本語版アイバーク子どもの行動評価尺度, 千葉テストセンター, 2016.
- 7) 鈴木竜世, 野畑綾子, 金直淑, 他5名: 職域のうつ病発見および介入における質問紙法の有用性検討 Two-question case-finding instrument と Beck Depression Inventory を用いて, 精神医学, 45(7), 699-708, 2003.
- 8) Abidin, Richard R.: Parenting Stress Index Manual. Pediatric Psychology Press, VA, 1983.
- 9) 福丸由佳, 伊東ゆたか, 木村一絵, 加茂登志子: 里親向け研修における CARE プログラムの効果の検討 里子と里親の関係作りに向けたペアレントプログラムの実践, 白梅学園大学短期大学紀要 54, 55-68, 2018.
- 10) 三鈷康代, 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究 - 親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連 -, Human Developmental Research, 22, 181-190, 2008.
- 11) Erica Pearl Messer, Robin H. Gurwitch, Barbara W. Boat, 他7名, Virtual Additions, John Paul Abner, Robin H. Gurwitch, Christina Warner-Metzger, 他2名, 日本語版 I-CARE 翻訳 福丸由佳, 細金奈奈, 木村一絵, 国広志保, CHILD-ADULT RELATIONSHIP ENHANCEMENT CARE TM, CARE Facilitator Manual, The Mayerson Center for Safe and Healthy Children, International CARE Collaborative, 2021.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村一絵, 石垣和子, 加茂登志子, 福丸由佳, 重松由佳子, 賀村悦子, 小柳愛子, 内田絵利子	4. 巻 19
2. 論文標題 2 - 6歳の幼児の問題行動が減少することを希望した母親に対する地域保健における子育てプログラム Child-Adult Relationship Enhancement (CARE) の効果 - ランダム化比較試験 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 石川看護雑誌	6. 最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村一絵
2. 発表標題 国内外におけるCAREプログラムに関する介入研究の動向と地域保健分野における実践と効果
3. 学会等名 第2回PCIT&CARE九州地区合同研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村一絵, 福丸由佳, 加茂登志子, 笠原亜希子, 賀村悦子, 小柳愛子, 内田絵利子, 石垣和子
2. 発表標題 2-6歳の幼児の母親に対する CAREプログラム(6時間)の 養育面に関する効果 -ランダム化比較試験-
3. 学会等名 第11回PCIT-Japan & CARE-Japan合同研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村一絵, 賀村悦子
2. 発表標題 CAREプログラムの母親のうつ傾向軽減に対する効果 ランダム化比較試験
3. 学会等名 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Erica Pearl Messer, Robin H. Gurwitch, Barbara W. Boat, 他7名, 日本語版CARE翻訳 福丸由佳、阿久沢由美、安藤智子、伊東史工、大原美知子、岡野典子、緒方広海、加藤郁子、加茂登志子、木村一絵、熊谷珠美、小平かやの、春原由紀、細金奈奈	4. 発行年 2022年
2. 出版社 CARE-Japan	5. 総ページ数 27
3. 書名 Child-Adult Relationship Enhancement - 子どもと大人の絆を深めるプログラム - CARE 配布資料 第3版改訂	

1. 著者名 Erica Pearl Messer, PsyD. Robin H. Gurwitch, PhD. Barbara W. Boat, PhD.他7名, Virtual Additions, John Paul Abner, PhD. Robin H. Gurwitch, PhD. Christina Warner-Metzger, PhD. 他2名, 日本語版I-CARE翻訳 福丸由佳、細金奈奈、木村一絵、国広志保	4. 発行年 2021年
2. 出版社 The Mayerson Center for Safe and Healthy Children, International CARE Collaborative	5. 総ページ数 67
3. 書名 CHILD-ADULT RELATIONSHIP ENHANCEMENT CARE TM, CARE Facilitator Manual	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福丸 由佳 (Fukumaru Yuka) (10334567)	白梅学園大学・子ども学部・教授 (32808)	
研究協力者	賀村 悦子 (Kamura Etsuko)	大野城市こども健康課	
研究協力者	小柳 愛子 (Koyanagi Aiko)	大野城市こども健康課	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	内田 絵利子 (Uchida Eriko)	大野城市こども健康課	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			